

『「維新革命」への道』について

兪 佳儒

荻部直『「維新革命」への道：「文明」を求めた十九世紀日本』新潮社、2017年

一 内容のまとめ

『「維新革命」への道』の著者によると、本書が語るのは「十九世紀の日本における思想の歴史である」という（1頁）。具体的に言えば、西洋「文明」を受け入れることを意味し、「文明開化」と呼ばれる「明治維新」という大変革に至るまで十九世紀日本の思想の歴史である。では、日本はなぜ「文明開化」をうまく受け入れ、「維新革命」という道を選んだのか。

著者は先行研究を批判しつつ、「文明史」という視座を提示した。著者によれば、civilization と訳語としての「文明」は、20世紀から今まで流行している複数形の用法とは異なり、日本が「文明開化」を試み始めたところには、いずれも全人類にとって一つしかない進歩する経路を意味し、普遍性を信じる認識であるという。そして著者は、たとえ道徳を相対主義的にとらえても人類共通の道徳があると主張する「ミニマルな道徳」という論理をアナログとして、普遍的な「文明」の要素も存在すると示唆した。それに基づき、著者は、「十九世紀」の日本にすでに流行している思想には、西洋文明と共通する点があり、当時の日本人はその共通点を発見したからこそ、西洋の物事をうまく受け入れたという仮説を提示した。この仮説を実証するために、以下の章の内容が展開された。

第一章と第二章は、主に「維新革命」という大変革の性質の確認である。第一章では、明治維新は restoration ではないことを確認した。明治維新は長い間に徳川政権から天皇親政への復帰という復古の意味を持つ Meiji Restoration と呼ばれ、「革命」ではないと認識されている。しかし、当時の人の視点からすれば、明治維新は確かに revolution である。「維新」と呼ばれてきたのは、維新

の担い手たちが儒学の意味で天皇に関わり、王朝交代のニュアンスを持つ「革命」(revolution の訳語)を避けるための操作である。第二章では、明治維新は思想と社会の変動であることを確認した。竹越與三郎の「乱世的革命」論と福澤諭吉の「智徳向上」説が指摘したように、明治維新は単に勤王派らの動きの結果でもなく、黒船の外圧の結果でもない。維新を可能にしたのは、19 世紀にわたる思想と社会の変化である

その思想と社会の変動というのは何だろうか、第三章から第十一章まで著者が解明してみた主要問題である。結論から言えば、それは「ひらけ」という認識の形成と流行である。第三章では、著者がまず「文明論」の進歩史観と儒学の尚古主義について論じた。二つの歴史観が相克するにも関わらず、荻生徂徠の影響を受けた明治知識人・西周は儒学的言葉で進歩史観を自然に説明した。著者は徳川日本において新しい歴史観はすでにあっただろうと結論づけた。

第四章からの四章では、主に経済思想を取り扱った。市場経済化に伴う経済発展を体験した豊かな町人層は遊芸として儒学を学びながら、現実を根拠に尚古主義を批判し始め、「今」と商業活動を肯定する歴史観を創出し、さらに自由市場と競争原理を重視する経済思想をも展開した。富永仲基、西川如見、山形蟠桃と海保青陵らの儒者はそうであり、古いイメージを持つ国学者の本居宣長もそうである。

第八章から第十章までは、宇宙観、「勢」、「郡県と封建」などのテーマを背景に、歴史発展の方向に関する思想について著者が論じた。著者によれば、蟠桃が西洋天文学を学びつつ、西洋で「ひらけた」学問が展開されていると西洋を評価するという。そして、一般的理解と異なり、宣長も西洋天文学の最新知識を積極的に吸収し、歴史が「勢」を持ち、ある方向へ成長しつつあると主張していた。儒者・頼山陽と国学者・伊達千廣も歴史における郡県と封建の変化から、歴史の不可逆性を読み取ったという。ついに、維新変革期の知識人たちは、西洋文明と遭遇し、民を治めるかという在来 of 標準により封建制を全否定し、歴史発展の方向である「文明」を選択することになった。

第十一章では、著者が福澤諭吉の文明論を中心に、「ひらけ」と civilization の出会いについて論じた。諭吉は人間の道徳と技術両方とも無限的に進歩すると

いう普遍法則を意味する **civilization** を、漢語で道德の高い統治者による統治のもとで世界が安定している状態を意味する「文明」に訳した。それは儒学の素養を身につける諭吉が **civilization** の内容に対する高い評価と共感を示しているという。諭吉の文明論により、近代日本思想史においては道德性の薄い「ひらけ」がついに文明史観あるいは進歩史観に到達した。

要するに、江戸後期の日本が経済発展の中で、すでに進歩史観と親和性が高い「ひらけ」の認識を持っていたからこそ、江戸末期と明治初期の日本人が、進歩を信じる「文明」(**civilization**)と共感しつつ、それをうまく受け入れた。つまり、普遍性を持つ「文明」というのは、単に西洋を起源として拡散し、日本の特殊性を超克し、日本を「占領」したものではない。日本でも普遍性を持つ在来の「文明」が生まれた。明治維新は、正に十九世紀日本人が共有した「文明」との共感を土台として起きた大変革である。儒学を軸とする近世日本思想史をステージとして、「文明」との共感に至る流れを、著者が描いた。

二 序章と第十一章の意義

1 序章の意義

全書の始めとして、序章は無論、問題提起、先行研究の言及と概念の確認等の役割を果たしている。ここでは、序章において論じられた「文明」と「十九世紀」という二つの言葉に注目しつつ、序章の意味を分析しようと思う。

以上に述べたように、ハンチントンの「諸文明の衝突」論のような今も流行している「複数文明観」と異なり、十九世紀の文明観は「普遍文明観」であった。つまり、十九世紀の人にとっては、人類の発展は一つしかない方向へ進むべく、進んでいるものである。ここで、「文明」の普遍性が確認された。しかし、これは単なる観念上の普遍性で、客観的に存在する普遍性を意味するわけではない。したがって、著者は「ミニマルな道德」という論理をアナログとして、普遍的な「文明」の要素が客観的にも存在するかもしれないと示唆した。このように、「文明」というものは地域（ハンチントンの言った文明圏）を超える普遍性を持つことが確認された。つまり、「文明（史）」は序章において地域特殊性を超えるために著者が説明した理論設定である。

一方、「十九世紀」はよく言及される明治維新前後の断絶性を超えるために、著者が採った時間設定である。著者が指摘したように、「1868 年における断絶だけに目をむけてしまうと、それ以前から進んでいた、社会と思想の構造変化と言うべきものを見落とすことになる」(23 頁)。「十九世紀」の時間設定は、「貫維新史」を意味するのだろう。本書の内容を読むと、実は著者が十九世紀以前の思想も取り扱ったことが分かる。それは、断絶性でなく、流れに注目するという著者の意識とも一致するだろう。

地域特殊性にせよ、断絶性にせよ、いずれも区別を本質化する結果である(前者は空間上、後者は時間上)。「和魂洋才」と「民衆不在」という二つの通説もそうだろう。「和魂洋才」は和と洋、魂と才の区別を本質化しており、「民衆不在」はエリートと民衆の区別を本質化している。著者の論述には本質化された区別を超える意図もあるのだろう。序章の設定のように、地域、維新前と後、魂と才、階層などの区別に縛られず、新しい考察と分析をする努力は、第一章から著者が始める。

序章の最後、十九世紀日本の文明探求を思想資源として、現代世界を考えるという著者の願望が示唆された。それも時間を超える(ある程度の)普遍性の宣言ではないかと思う。

2 第十一章の意義

第十一章では、著者がそこまで言及されてきた様々なテーマ、例えば経済思想、宇宙観、政治制度をまとめつつ、「ひらけ」と civilization の出会いについて論じた。最終章として、第十一章は序章において提示された仮説に対する最後の実証の努力である。無論、考察の結果はその仮説を支えているのは間違いない。しかし、第十一章では、著者が日本と西洋の共感を論じつつあるが、その差にも言及した。

例えば、江戸時代から日本独自の文脈で育まれた「ひらけ」の感覚は、civilization 的進歩史観と完璧に一致しているわけではないことが、第十一章で示唆された。「文明」は経済の豊かさと道德の優れ、両方の意味を持つものに対し、「ひらけ」の言い回しの漢語である「開化」はただ欲望の解放であり、道

徳性が薄い。したがって、「ひらけ」は進歩史観そのものであるというよりは、ただ進歩史観と親和性が高いものであるといった方がいい。

「自由」と **freedom** に対する理解もそうだろう。日本語と漢語には、**freedom** と完璧に対応する言葉がないため、日本人が **freedom** を理解できないわけではないが、やはり翻訳の過程で誤解が生じたりして、理解が異なることがあるかもしれない。それは、日本が独自のコースに辿り文明へ進んでいることを意味するという（265 頁）。

徳富蘇峰の批判もそうだろう。封建から諭吉が自治精神を見つけたのに対し、若い世代の蘇峰がそれを全否定した。二人とも進歩を信じているものの、やはり差があることを意味する。

第十一章で論じられたそれらの違いは、本書で設定された文明の普遍性がそのアナログのように、「ミニマルな普遍性」にすぎないことと繋がっている。つまり、文明の客観的な普遍性はやはり限界がある。したがって、序章最後の著者の願望は、現代世界における文明同士の紛争を解決するために、十九世紀日本と西洋の出会いが唯一の答えであることを意味せず、中江兆民の蘇峰批判のように、過去の経験と対話しつつ未来を考えることを意味するのだろう。